

を利用するにも社會の法則を知らなければならぬ。吾人は人情を知り、
 群衆心理を知つて、全社會を自由に利用せなければならぬ。

田舎を利用するは即ち自然を利用する事で、都會を利用するは即ち
 社會を利用する事である。

田園は人の息ふ所で、都會は人の働く所だ。息ふ所には仁義と平和
 と安逸とがある。働く所には邪曲と争闘と智識と富と不安とがある。
 吾人にして若し生活の戦に疲れて、暫し息はんとならば、田園を利
 用するもよい。然し飽く迄も積極的に活動して、欲望の満足を求めん
 とならば、紅塵の眞只中に身を投じて努力し奮闘し、諸種の設備に依
 つて智識と富と名譽とを得て、吾人心身の欲求に十二分の満足を與ふ

べきである。これ即ち兩者を利用する最善の方法である。

元來物の價値は、その利用と一致して居る。多く利用されるものは少
 く利用されるものに較べてその價値は大である。かくの如く物に依り
 價値の大小こそあれ、世に全く無價値なものはないのである。何物に
 も利用の途は具つて居る。カントは利用の目的が全く物品にのみあつ
 て、人間は利用すべきもので、利用されるべきものではないと云つた。
 然し人間は他物にこそ利用されざれ、人間同士は盛に利用の仕合ひを
 やつてる。即ち他を大に利用せんとすれば、先づ自ら他のために大に
 利用されなければならぬ。他の爲に働いてこそ、人も使ふ事が出来る。
 例へば社會のため大した働きの出来ない土方人足などは女中を使ふ事

は出来ぬが、高等官の學者や役人は社會のため比較的大きな働きが出るから、自分も亦澤山の女中や書生を使へるのである。僕を使はんとならば先づ自ら社會の僕とならなければならぬ。今日では人々が社會への奉公は大體その收入を以て標準としなければならぬ。一日五十錢の收入ある車夫は五十錢の奉公をして居る、一日數十圓乃至數百圓の收入ある大官紳商は又それの奉公をして居る。車夫が五十錢取つて五十錢使ふのは、五十錢の精力を社會のために費して更に五十錢の精力を社會より受取るのである。彼にして五十錢得て六十錢使へば、彼は十錢の精力を社會より借る事となるのだ。此一事より見ても世界が如何許り數理的合理的に出来てゐるかが分らう。

先哲、利用の實例は澤山あるが其一二を擧ぐればトーマス、エドールスは有名なる動物學者であるが、彼は少年時代濱邊で小蟹を捕へて一心にその研究をなし遂によく大動物學者となり得たのである。

軍醫總監石黒男は節約質素を以て有名な人である。その一例として彼は今にをき手紙は必ず他所から來た古手紙の裏へ書く事とし、封筒は之も古筒封の上皮を捨てて中味を其儘使用するさうだ。男爵として少し極端の様であるが、今日の如く各階級を通じて奢侈贅澤の漫延する時代に於ては確かに絶好の諷刺であらう。新物を求むる前、先づ舊物を利用し盡せ。是れ實に利用哲學の眞髓である。

其八、如何にして精神を統一すべきか

至誠——注意の集中——信仰——凝り性——目的の單一——專問
道——一の主義——一時一事

大學者ボツクストの努力——小説家泉鏡花の凝り性

精神的の進歩は萬心を一境に集むる事に依りて得らるゝ。如何に多能な人でも、多能に任せて、心を八方に分つて居ては遂に何事にも完全な成功は得られないであらう。著者は嘗て鳥取のステッキ工場に於て、幾千の洋杖に種々の模様を焼き付けて居るのを見た。その装置が頗る奇抜なもので、石油ランプの火をブリキ製細管の末端に導き、火力の集中に依つて巧みに焼付を爲つて居た。太陽の焼點がものを焼き

切るのは之も畢竟火力の集中である。如何に微弱な火力にても之を一
點に集むればかくも偉大なる効果を現はすのである。精神集中の效も
これと同然である。

精神を統一せんが爲には、必ずや確乎たる唯一の目的がなければならぬ。兩頭の蛇ではならぬ目的が幾つもある。精神が分れる。目的は必ず一つでなければならぬ。最大目的の一つとして群小目的を之に隷屬せしめなければならぬ。そしてこの最大目的の下にあらゆる心的活動を統一し、如何なる精神活動もこの目的の成就を助けなくてはならぬ。かくしてこそ初めてその目的は成就をみるのである。

精神統一には至誠を以て當らなければならぬ。至誠とは純一の相

ある。善ならば善一式、悪ならば悪一式他に何物をも交へざる事である。悪人にも至誠の人はある。吝嗇漢にも至誠の人はある。彼等は必ずや悪人として成功し、吝嗇漢として成功して居る。窃盗術でも詐僞術でも貯金術でも金儲術でも一心不亂に勉強すれば、遂にはその道の蘊奥に達して立派に成功し得るのである。之等はずより學ぶべきでないが、吾人にして至誠を以て善事に當ればものとして成らざるはなく、事として遂げざるはない。精神一到何事か成らざらんと云つたは實にこの事である。

精神の統一には注意の集中が第一である。吾人の眼前や身邊には種々の色彩や音響が雜然として見え又聞えて居る。歩を運んで他の所に

行けば、更に異つた色彩音響に接する。之等を一々注意して、一々記臆し、判断せんとしたなら脳髓が幾つあつても足りないのである。茲に於て乎必ず選擇の必要が起る。これ等の中から比較的自分に關係の深い、又利益するものを選んで耳目に入れる、注意する。かくして初めて腦力體力の經濟は行はれる。

一生蟻許り注意して蟻學者になつたものもある。蜘蛛許りに注意して蜘蛛學者になつたものもある。廣い意味で云ふ人生の經驗は成丈廣くないと不可が、自己の職業とする所、自己の天分とする所は必ず専門的に、一局部に偏して必ず切り込んだ研究をしなければならぬ。心理學者の説では、書齋などへは餘りコテ／＼裝飾をして書齋など

を澤山並べるのは注意の集中を障げるから可くないと云ふ、有理な説である。

信仰は精神の統一を助ける。それが宗教的信仰でも、又藝術の信仰でも、英雄に對する信仰でも、道德上科學上の信仰でも、信仰であれば何の種類の信仰でもよろしい。吾人にして心中、一の信仰があれば不知不識の間、吾人の精神はこの信仰のため統一せられて立派な品性を養ひ得るものである。宗教家や、一技一藝の士が、いづれも一種高貴なる品性を養ひ得たるは畢竟之れが爲である。

精神統一には凝り性が必要である。一事に凝つて他事を放擲する位の決心がなければ、その業その藝に精通する事は出来ない。ワットが

蒸汽機關の發明に熱中した時、卵と間違えて懷中時計を熱湯中へ投じた事は有名な話である。又明治文壇の異彩と云はるゝ泉鏡花は非常な凝り性で、机に對ふ時には必ず一炷の香をたき、机上の塵芥を丁寧にはたき一切の邪魔物を除いてしまはないうちは、決して筆を下さないさうだ。動物學者として有名なボツクストは云つた。予は過去に於て一も非凡の事なし、唯尋常の道を専念に歩みたるのみと、之れ亦精神集中の結果、尋常の行爲を積んで遂に非凡の事業を成就したのである。

其九、如何にして抵抗力を養ひ得べきか

人生は戦ひ——無抵抗主義は滅亡主義——自己の愛護は人間の義務——萬物の自衛機關——抵抗力と保護物——活動停止と社會の

壓迫——明察と戒愼

天下の怪僧濱口熊嶽の鍛錬

昔ギリシヤの哲學者は云つた、萬物はみな争へり。目を舉げて見よ、老樹の風を受けて颯々の叫びをあぐるは是れ風と老樹との戦でない、怒濤の亂礁を噛むは濤と岩との戦ではないか。單に之れ許りでない、蟲は蟲と戦ひ、獸は獸と戦ひ、人は又人と戦つて居る。こればかりでない。更に面白いのは人體の細胞迄が戦つて居る事である。即ち新細胞は舊細胞と戦つて之を驅逐して居る。現にかく書きつゝある著

者が執筆の切那に於ても、著者の毛髮の末端にも爪の末端にも細胞の戦争は尤も激烈に行はれつつあるのだ。そして戦争の結果、舊細胞が一敗地に塗れて、老廢物として出て行く後へ新細胞は堅い根城を築くのである。之は即ち生理上でいふ新陳代謝の現象である。戦争をするために萬物は存在してゐるのではないが、萬物の存在には戦争は避け難い現象である。最初から備つて居たものか、又は永い戦争の結果發達したものかの邊は不明であるが、兎に角萬物には、それ／＼自衛機關が具つて居る。蜂類の針に於ける如く、獸類の爪牙に於ける如く、魚類昆蟲の或種類に見らるゝ保護色の如く、其他百沷のものに夫々自衛機關は備つ

て居る。

人間は流石高等動物であつて、身體へ露骨に自衛機關を並べるやうな醜且愚な事はしない。人間はその天賦の知識に依つて武器や保護物の發明をする。かくして銃劍刀槍は出來た。城壘、軍艦は出來た。人間の自衛機關はこれのみではない。言論文章みな有力な武器である。殊に彼等の頭腦には千萬の短刀やピストルがある。百萬の猛獸毒蛇も一時に殺すべき計畫もある。恐るべきは實に人間の腦髓である。侵略主義の可否は今茲に論ずべき限りではない。唯他の侵略に備ふるだけの自衛は常になければならぬ。今日無抵抗主義者の云ふが如く他の侵略を許して、何等の抵抗をも試みなかつたなら、吾人は必ず滅

亡の運命を免れない。吾人のみではない。家族も同胞も、民族の根絶がないとも云へない。

元來人間は生れた以上、その生を愛護し、定命を完うすると云ふ事は人間の權利であり。又義務でもある。理不盡に刃を加え、權利を侵害するものがあれば、蹶然起つて大々の抵抗を試むべきである。倒れて後止むの決心で飽く迄も抗争しなければならぬ。武士道は實に之から起つたものである。大和魂とはこれである。この點に於て武士道にも大和魂にも抜くべからざる哲學的根據がある。

吾人は單に人間同志戦ふのみならず、吾人は又自然とも戦ひ、病氣や貧賤や失意などとも戦はねばならぬ。この戦が寧ろ普通である。そ

の爲には吾人は常に健康でなければならぬ。富まねばならぬ。何よりも先きに意志が強固でなければならぬ。強固なる意志はあらゆるものと戦つて終に最終の勝利を得べき根本的抵抗力である。

他の侵略を防ぐには明察と戒愼が必要である。諸病の原因たる。パチルス（インフルエンザ）の侵略に對しても吾人は明察に依つて之を預知し、更に戒愼を加えて節養を守れば肺病もコレラもチブスも之等のものは終に何の威力を振ふ事も出来ない。

活動は實に最大の抵抗力である。活動せる身體には病菌も繁殖し得ないし、活動せる精神には何等の誘惑も些の勢力がない。吾人にして活動を停止すれば、その瞬間から四圍の壓迫を受けなければならぬ。

い。例へば水だめに子子の生く如く、死體に蛆蟲の生ずるが如く。

一時は帝都の大評判となつて、全國の津々浦々にその怪名を謳歌はれたる人身自由術の開祖と自稱する怪僧濱口熊嶽の如き、決して世間で思ふ様な山師ではない。彼が少年時代那智の奥山に於て一老僧に師事したる修養の経路を願れば、彼も亦一個立志傳中の主人公である。殊に彼が寒日那智の大瀧にうたれ、一日一杯の蕎麥粉に飢ゑを凌いで、不眠の修業、練胆の修業に一命を賭して努力したのは、實に感すべき次第、後來彼が一大通力を得、千萬人と雖我れ往かんとの大勇猛心一大抵抗力を得たのは要するに此間の修養鍛練に胚胆した事を知らねばならぬ。

其十、如何にして幸福と安心を得べきか

預期の快と切那の快——本能の保護と性慾の永續——自由と快樂——引力と愛嬌——和氣と禮儀——文明の不自然と矛盾——非科學的生活の弊——適宜の歡樂は健康の基——人事を盡して天命を待つ——信仰
奴隸開放の首唱者シャープの快調——ミラホーの後悔——トマスライト黒奴を恤む——ジョン、パランスの子女訓——パーレーの名言——ロバートソンの感化——モンテメ夫人と禮儀

人生の目的が、直ちに幸福そのものであるか何うかは大ひなる疑問であるが、然し吾人が衷心深く幸福を望んで居る事丈は明白である。一體幸福とは何であらう。幸福とは即ち快樂の永續である。食慾と色慾とかに依つて得らるる切那の快は決して幸福でない。幸福とは

即ち之等の官能の快樂と精神上の悅樂との完全なる調和の上に見らるるのである。

元來快樂には三種ある。第一が預期の快、第二が切那の快、第三が回想の快である。第一は未來の快、即ち理想的快樂、第二が現在の快、即ち現實の快樂、第三が過去の快、即ち追憶の快樂である。右の内での快樂が一番かと云へば、これは快樂の種類にも依る事で一概に斷言は出来ぬが、多くの人が未來の快即ち預期の快樂を樂む様である。來て見れば聞くより低し富士の山で、吾人の想像は無制限であるから、いくらでも愉快な想像が出来るが然し實際になるとさうはゆかない。現實には常に一定の範圍がある。いくら面白い事でも大概知れて居る。

殊に預期の快丈なら如何なる不健全な事でも、直接の害は受けないが、現實の快樂はすぐその影響がある。例へば酒色の快樂など思ふだけなら、格別の害はなけれど、實行すると忽ち種々の損害を受ける。快樂の追憶も確かに樂事の一には相違ないが、然し之は只思つてみるといふ丈の事で、未來に何の期待はないし、殊に歲月と共に楽しい記憶は特に忘れ勝ち、薄れがちなものであるから、これはホンの消閑の具たるに過ぎない。

少年時代は空想勝ちなもので、預期の快樂が多く、壯年期は實行時代であるから、現實の快に傾き、老年になると、意氣銷沈、徒らに過去の快樂を夢むるに過ぎない。

普通、世人は何と云つても快樂を追うて生活して居る。快樂の要求が多ければ多いほど、彼等はその満足のために、活動を餘義なくされる故に世の活動家と云はれる者は、大概は酒色に溺れたり、着物道樂があつたり、貯金道樂があつたり、何か必ず樂しむ所がある。貯金道樂などは大して弊害はないが、肉體の快樂は多くは過ぎ勝ちなもので過ぎると必ず弊害がある。性慾の如き是れ人性自然のもので、適宜に之を滿せば、却つて健康に裨益する所があるが過すと生命に關する病氣にもなる食慾の如き必要缺くべからざるものなれど過すと胃腸病其外諸病の原因となる。茲に於て克己制慾の必要が起る。

然し克己など云ふ事は君子にして初めて云ふを得べし ナカ〜常

人の爲し得ざる所である。殊に肉體は度を過し勝ちなもので、その爲、生殖器を初め胃腸其他の機關を害ひ、極度に到れば醫藥もその効を奏せざるに至り、一生快樂を遂げ難き不具の身となるか、又はその爲に死に至る事さへある。

明哲は身を保つと云ふ。彼等は決して快樂を極度に追及する事はない。情慾も口腹の慾も適宜に之を満足せしめ、以て本能を保護し情慾其他肉體の作用を健全に永續せしめんと計るのである。

眞の快樂は必ずや何事にも自由を伴ふたものでなければならぬ。職業の自由、活動の自由、起臥飲食の自由等の自由を得なければならぬ。如何に名譽の地位も如何なる富も如何なる爵位も之を得るが爲に、人

格は躡躑せられ、心身は束縛せられ、黄金の前に權門の前に個性も主張も一切のものを放げ出さなければならぬとすれば、彼の境遇は決して幸福でない。寧ろ地獄である。黄金も爵位も彼を縛るの鎖たるに過ぎない。

貧乏でも自由の生活が遙かに幸福だ、籠に囚はるる鴛よりも、青空を飛び行く雲雀の方がいくら幸福だか分らない。權門に媚び諂らて一日の安きを偷まんより、我が分に安んじたる簡易生活がいくら閑氣でいくら幸福だか分らない。

眞の幸福を得、眞の安心を得んには決して利己主義ではならぬ。他人にも必ずやよくしなければならぬ。心中深く他を愛するが第一

必要であるが、他を愛するの心は必ず之を外貌にも出さなければならぬ。即ち外貌に愛嬌がなければならぬ。愛嬌は大なる引力である。愛嬌のある所へ人は必ず集つてくる。

他の顔は我が顔の鏡なりと云ふ。自分が愛嬌を作れば、他も必ず愛嬌を浮べて自分を迎えてくれる。その間に云ふべからざる情誼が出来る。云ふべからざる快感も起る。

愛嬌は和氣である。吾人は和氣があると共に禮儀がなければならぬ。他に優しくすると共に、禮儀は飽く迄も正しくせなければならぬ。社會は親みと義理とで動く。吾人にして完全な幸福を受けんとせば、我利くではならぬ。必ず他の爲に盡し、禮儀を正して交らねばならぬ。

文明は吾人を幸福にしたか又不幸ならしめたか、この種の統計はなから詳しくは分らぬ。

一部の自然主義者の如く文明を全然攻撃も出来ない。文明の利益も澤山ある。機械の發明や動力の應用や、其他家屋調度の整備など今人が文明に負ふ所は頗る多い。然し文明の根本に於て人間の幸福と全然背馳した不自然や矛盾がある。

文明の不利益は第一食品の精製である。白パンや白米は今日分解の結果に依ると養分の主要部を捨てたものだ。副食物の調理も餘りに纖巧に流るゝの結果、養分を捨つるのみか、引いては消化器の鍛練を缺ぐ事となり、消化器病は益々多く、人體は愈よ弱くなつた。第二は刺

靴物の過用である、酒煙草香料等刺激的飲食をなして、腸胃其他を害するのみか、目にも耳にも皮膚にも脳にも、一切の感官に強烈なる刺激を與へて之等を漸次破壊せんとする傾向である。近來眼病、腦神經衰弱の太く増加せるは畢竟之が爲である。第三は衣服、家屋の誤用である。元來身體保護の目的を以て造られたる家屋、衣服は今や實用は第二として専ら裝飾の用に供せらるゝに至つたのである。これは實に生理上經濟上より見て非常なる損失である。第四は即ち性慾上の矛盾である。黄金や虚榮のために左右せられて生涯獨身に終るもあり、少女にして老人に嫁ぐもあり、青年の老婦を迎ふるもあり。其他過度の遂情や不倫の交合に依つて種々の弊害を作つて居る。第五は心身過度

の使用である。今日生活困難の結果又は虚榮や黄金熱のため、人體の規則以上に之を酷使し、遂に病を得るに至り、然らざるも天與の幸福は之を得る由もない事となるのである。要するに文明生活の不自然と矛盾とはあらゆる點に於て人間の幸福を害して居る。

今日は科學の世なりと云ふが、然し世人は依然として非科學生活をして居る。科學の應用は主として工場や軍事や通信運輸の機關に限られ、各家庭には未だ科學的光明は輝かぬのである。我國など僅かに都會の地に於て水道と電氣と瓦斯が一部の家庭に利用せらるゝ、外科學的設備は何一ツない。衛生や經濟と云ふ事は全くお留守にしてある。人間は氣の持ち様一つで、如何なる善境も樂觀する事が出来る。即

ち借金取りも鶯の聲だ。然し艱難は決して求むべきでない、出来る事なら成丈け順境に立つて精神的にも又物質的にも相當の歡樂を盡した。いものだ。極度の苦痛が壽命を縮むると反對に、適度の快樂は吾人の健康を増すものである。

絶對の安心を得るには一大信仰が要る。宗教的信仰でも何でもよい。唯吾人の歸依する所がなければならぬ。強固なる地盤に立てる家屋は少々の風にはビクともせぬ。偉大なる信仰の下に立てる人は、晏如として如何なる艱難とも戦ふのである。

吾人の今日爲す所は、或はよき實を結ばないかも知れない。然し吾人は人事を盡して天命を待つのみである。かく覺悟してをれば、如何なる苦境に遭遇するも決して駭かないのである。安心立命の秘決は全くこゝだ。

碩學ヒユーム曰く、予は憂愁の人となりて鉅萬の財を抱かんより、寧ろ赤貧にして快樂の性を具ふるの人たらんと實に至言である。古來の英傑名士にして眞に快濶の精神を抱きしは數へる位しかない。

シャープは奴隸開放の運動者として有名であるが、彼は家庭に入りては兒童と共に戯れ、自ら馬となり小兒を乗せて走つたといふ。

トーマス、ライトは典獄として頗る令名のあつた人物であるが、彼は非常な快濶漢で、衷心より罪人を恤れんで居たので、罪人も亦父の如く彼を慕うた。

ジョン、バウンス夫人は有名なる教育家であつたが、彼は唯口を以て訓戒せず、衷心子女の幸福を願ふの心より、身を以て範を示し、殊にそのしたゝる如き笑顔で以て接したので、子女はみな慈母の如く慕うたのである。

ロバーソンは天性柔和にして慈心に富んだ人物であつた。或時彼が寺院より出づる姿を見て門前の一少女は突如として涙を浮べた。何故の涙か、之は即ち彼が慈愛の情を以てその貧少女を見たからである。人の心、人の愛情は電氣の如く感應する。一言も費さずして忽ち感動せしめ得るのである。

モンテニス夫人は曰つた。一錢も費さずして何物にても買ひ得るは

愛嬌と禮儀のみと。

パーレーは嘗て女王リウベスに謁して曰く陛下願くば萬民の心をなづけ給へ、然らば陛下は萬民の心と共に萬民の金庫をも得給ふべしと。佛國革命家として縦横の鐵腕を揮ひしミラポーは嘗て喟然として嘆じて曰く、予は少年の時酒色に耽りて精力を枯渴せり。故に今老年に及んで切りに鞭撻さると。

其十一、修養一家言

○時人金錢を用ゆるの道大に誤れり金錢を用ひて衣食の料を購ふは可し。唯虚榮と肉慾に驅られて必要以上の贅を盡し、心身を破壊し、

その自由を束縛するに至つては、是れ馬鹿の骨頂と云ふべし。元來金錢は精力、時間と共に、吾人の必要を充たしたる上、更に吾人の自由をも購ふの料なり、酒色に耽り、衣類諸道具の贅を盡し、好んで煩累を設くるの愚をなす。心身の自由を得べき金錢を以て、却つて自由を購ふ。是れ金錢の用途を誤れるが故なり。

○生存競争は要するに頭腦の競争なり。健腦術は應て生存競争の最大武器也。

○常に競争的態度を持続すれば、精力を消磨し易し、一定時に修養蘊蓄し機會を選びて一時に發揮し、以て競争すべし。

○生存競争の優者は、強、硬、鋭、長、大也。

○人間社會の向上、推移は腦細胞の變化のみ。

○吾人の世にあるは、軍人の戰陣の間にあると何の異なるなし。

○處世術は應て戰術なり、孫吳の書は吾人處世の羅針盤のみ。

○吾人を取圍める社會は、吾人の敵とならずんば、味方なり。吾人は逸早く敵と味方とを見分け、敵は極力之を攻撃し、味方とは極力相和し、敵を少くし、味方を大にする事に依り、吾人の戰鬪は勝利を得る也。和か戰か、握手か戰爭か、吾人は必ずや二者その一を擇ばざるべからず。

○職業の變化は可し、目的は生涯一貫せよ。

○微を積みて大を致せ。

○收め得らるる限り收めよ、一旦收むれば夫れ以上の收獲の豫期なき以上、決して手離す勿れ。

○決行には選擇、勇氣、機敏の三要素あり。

○強者は金銭と權利との奪取に際して種々の理由を付す。その理由は彼等が強者なる故道德として社會に通用す強者の道德とは是れ也。

○生得の貧弱は、非難すべからず。之を非難するは慘酷也。

○自己の能力を發揮して世の賞讃を得る能はざる時は、遂に氣遅れして他事をなす能はざるに至る。

○快樂は豫期にあり、豫期は心身の餘裕也。餘裕は力なり、力は快樂也。

○實行する資格ありて而かも實行せず。是れ餘裕なり、力也。

○高橋お傳も嫂のお政も婦女子固有の慾望を充さんが爲、女相當の武器を以て世と戦へり。彼等にして男子なりせば、かくも法網に觸るるの愚はなさざりしならん。

ナポレオン曰く「予は常に勤む、頗る沈思する、予若し如何なる機會にも應じ如何なる事件にも處し得るとすれば、之に處する以前に永らく工夫したるためである。



附 録

修 養 小 品

○ 成 功 と 犠 牲

吾人の態度は順應的でなくば、超然的だ。即ち周圍に順應するか、さもなくば社會から獨立して隱遁的生活を爲すか、二者その一を選ばねばならぬ。然し超然的態度と云つた所で、之亦社會より離れて自然に同化するのである。社會よりも自然よりも一切のものから孤立すれば、到底生存し得られないのだ。

吾人にして苟も生存する以上、必ずや何物かに向つて適應作用は營んで居る。しかも茲に注意すべきは此適應作用なるものは、何物かの犠牲に依らなければ決して行はれない事である。例へば吾人にして全然社會に適應せんとせば、必ずや自然の方面に於て心身の犠牲を忍ばねばならぬ。若しまた自然に適應せんとせば必ずや社會的成功の幾部を捨てなければならぬ。兩者揃つて完全な成功を見んとするは、到底不可能の事だ。

世に兩全と云ふ事は無い。一方に滿れば一方は缺ける。成功も進化も適應も犠牲無しには到底行はれない。

談話しても、讀書しても、必ず一方に細胞の消失がある。

第一人間の生存と云ふ事は、動物の獻身的犠牲に依つて行はれて居る。若し動植物が人間に食はるる事を肯んせずして極力峻拒したならば、吾人は一片の食物をも得る能はず。遂に餓死しなければならぬ。人類の犠牲は獨り動植物のみではない。人間同志でも弱者は強者の犠牲となる。又吾人自身でも衣食を得んがためには心身を苦役せねばならぬ。同人の言動でも大目的のためにはあらゆる行爲をその犠牲にして悔ひない。

吾人には卑むべき不健全な慾望がある。然し健康の爲には、これ等の慾望を犠牲にして悔ひない。

二兎を追ふものは一兎を得ず。二個の目的に適應せんとするは不可

能である。如何なる場合にも大目的のためには、他の小目的はその犠牲とならねばならぬ。

凡そ世上に苦痛、煩悶のあるは、この犠牲を難んずるからだ。二兎を追ふからだ。一方に適するを知り乍ら、尙他に未練を残すからだ。要するに未練だ。執着だ。

常人で居乍ら、金も欲しい、宗教家にもなりたいと思へば、煩悶は起らざるを得ない。金と神には兼ね仕ふべからずだ。釋迦やキリストは何故家庭を捨ててあらゆる苦行をなしたか、ダイオゼネスは何故アレキサンダーの徳を拒んだか。古來の聖者、偉人、英雄悉く高價なる犠牲を拂つて其目的を達して居る。

翻つて今日の青年を見るに、常識は進んだ。小伶俐になつた。然し彼等には古英雄の犠牲的大勇猛心がない。彼等には至誠が無い。熱情がない。信念がない。一事に全精力を集中して初志を貫くと云ふ大氣力がないのである。一事に當つて、犠牲を吝まざるは、尤も賢き成功術である。

○ 人生の勝利者と求心生活

凡そ宇宙間の事物は相結ぶの力に依りて成り、相斥くるの力に依つて破れる。前者を求心力と云ひ、後者を遠心力と云ふ。是等兩力は世界發展の爲には最大必要の力である。若し夫れ兩力其一を缺がば、成

り。し。も。の。は。破。れ。ず。破。れ。し。も。の。は。成。ら。ず。茲。に。世。界。の。進。運。は。ハ。タ。と。止。る。の。で。あ。る。

要。す。る。に。成。る。は。壊。る。に。初。ま。り。破。る。は。成。る。に。初。る。生。物。が。そ。の。生。を。成。す。は。他。物。を。破。つ。て。之。を。食。へ。ば。こ。そ。で。あ。る。子。孫。の。生。活。し。得。る。は。祖。先。の。順。々。に。死。す。る。か。ら。だ。若。し。夫。れ。人。に。し。て。死。せ。ず。死。す。る。も。腐。ら。ず。人。形。を。具。し。て。千。萬。年。地。上。に。留。る。と。せ。ば。茲。に。新。陳。代。謝。の。途。は。止。つ。て。一。大。事。を。醸。す。で。あ。ろ。う。

兩。力。共。に。必。要。で。あ。る。が。吾。人。の。「生」。よ。り。考。ふ。れ。ば。吾。人。は。主。と。し。て。求。心。力。に。頼。ね。ば。な。ら。ぬ。吾。人。の。出。生。そ。の。も。の。が。已。に。求。心。力。の。結。果。で。あ。る。母。胎。に。於。て。精。子。の。結。合。し。た。も。の。が。即。ち。吾。人。で。あ。る。

吾。々。が。求。心。力。に。依。つ。て。空。氣。や。水。や。蛋。白。質。や。含。水。炭。素。な。ど。を。集。つ。た。も。の。は。骨。や。血。や。肉。と。な。る。

肉。體。が。か。く。し。て。出。來。る。と。共。に。精。神。も。種。々。の。要。素。を。吸。收。す。る。人。間。が。物。質。元。素。や。心。的。元。素。を。引。き。付。け。て。生。活。を。營。む。の。は。丁。度。地。球。が。引。力。に。依。つ。て。人。間。其。他。を。吸。集。し。て。同。様。だ。

人。間。の。求。心。力。と。は。氣。力。、體。力。、能。力。、知。識。、金。力。、愛。な。ど。で。あ。る。殊。に。金。と。愛。と。は。大。引。力。だ。能。力。知。識。で。得。れ。な。い。も。の。も。金。さ。へ。出。せ。ば。千。里。を。遠。し。と。せ。ず。し。て。集。つ。て。く。る。氣。力。で。壓。し。て。も。才。辯。で。説。く。も。人。の。心。は。到。底。動。か。せ。な。い。唯。愛。に。依。つ。て。の。み。引。き。寄。せ。得。れ。る。の。で。あ。る。求。心。力。に。依。つ。て。生。活。の。材。料。を。澤。山。に。集。め。得。た。狀。態。を。吾。人。は。富。と。呼。ぶ。

の。で。あ。る。

富とは單に動産や不動産のみを云ふのでは無い。肉の付いたのも富である。學識の豊かなのも富である。信用の厚いのも富である。良友良先輩の多いのも富である。何に限らず善い事物の多いのが富である。求心生活の目的はこの富を作るにある。この富を得て、吾人は初めて人生の幸福を味ふ事が出来る。人生の勝利者となる事も出来る。

○大食快眠主義

人間の欲望は無限だが、之等の根底となつて全生活と最大關係を有するは、食慾、眠慾、生殖慾の三慾だ。前二者は自己保存の慾で、後

者は即ち種類保存の慾だ。これ等三慾の完全な者は腦力に缺點があつても生理的人間として完全である。

生殖慾は子孫を望まぬ人、又はこの種の快樂を拒む人には全く不必要であるが、唯眠食兩慾に至つては、人間の生存する限り一日も廢すべからざるものだ。

元來人間の生存は一種の消費作用である。此消費を補ふ爲には眠食が必要だ。

眠食の安泰は健康の裏書だ。病狀を尋ねるに眠食を第一にをくは之れが爲だ。今日某野蠻國で挨拶に舌を出すのは、健康を告げるのである。又支那の某地では食慾の振否を尋ねて挨拶に代へるさうだ。

眠食を重んずるは獨り今日の野蠻人に限らぬ。歴史を溯ぼるに、原人時代に近づくにつれて其風が盛だ。單に重する許りでなく、彼等は實際駭くべき大食漢であり、快眠漢であつた。

日本の戦記にも到る所眠食の事が書いてある。一廉の大將になると一食一升を盡くし、鼙聲雷の如しとある。

人類學上の研究でも原人が頗る健啖家だつた一事は立派に證明して居る。

然るに文明の進歩は眠食を非常に平凡化した。文明人の注意は之を捨て、更に華美なる更に刺撃的なる方面に向つた。文明人の會話や文章中からは、眠食は驅逐せられて、代りに政治、宗教、文藝などと

云ふ滅法高尚な事が這入つて來た。高尚ではあらうが、この爲に人間は決して幸福は得られなかつた。

精神は非常なる進歩を示したが、肉體は少しも變らない。胃は萬古以來五時間おきに食物の入り來るを待つて居る。腦細胞は一日七八時間の休息を要求して居る。人間の思想は如何に高尚にローマンチックになつても、肉體は依然として廿一萬年來の要求を續けて居る。嗚呼何等の好諷刺、何等悲惨にして、しかも何等滑稽なる矛盾ぞ。

我が社會を見るに、上流は居常運動不足と不機嫌の爲、山の如き珍味佳肴も少しもまじは感じないし、精神過勞の爲夜もおちく眠れない。又中以下の家庭に入れば、米價暴騰の時節柄、極端なる粗食に

甘んじ、營養と快樂と共に失つて居る。
大に活動せんとする者は、宜しく大に食ひ且つ快く眠らなければならぬ。大食快眠の一事は大活動を要求せる現代に於て、萬人の正に實行せざるべからざる最大要件である。

○生活と經濟

空理空論の時代は過ぎて、實利實益の世となつた。議論より實際の世となつた。社會は著しく數理的になつて、何事にも算露盤を持つ世の中となつた。

今日我が國各階級を通じて、實際主義、常識主義の鼓吹せられるの

も、之れが爲だ。個人的な生活問題や修養問題の研究されるものも之が爲だ。

總ての點に於て今日ほど經濟的な時代はない。

經濟學と云ふものの出來たのは割合近代の事であるが、經濟的觀念

や富の研究は、經濟學以前からあつた。

宇宙間、全然經濟を離れたものは何一つないが、人間生活も亦生産

と消費との關係である。即ち吾人は食物を消費して生活力を生産し、

腦細胞を消費して、新事物を生み出す。是等は即ち生活の經濟である。

吾人が歩行にも三角形の一邊を通つて迂廻を避けたり、談話や文章

の無駄を省くなど、吾人は何事にも常に經濟的打算は決して忘れない。

要するに吾人の日常生活は、経済的観念と握手して居てこそ初めて諸事物の節約は行はれ、最も圓滑に生き得るのである。

○眞人とは何ぞや

眞人とは氣力と知力に秀でたる發動的の人物である。彼は強大なる意志を以て常に世界に克たんとして居る。彼は先づ自ら勝利の暗示を與へる。かくして彼の胸中には常勝の確信が出来る。氣力充實の人に於て一旦常勝の確信を生ずれば、彼は最早尋常の人間でない。恰かも強力の電氣が觸るゝものに、一大震動を與へる様に彼の偉力は一切の人と物とを征服せずには措かない。

彼は身外の敵に克つ前、まづ身中の敵に勝つのだ。一身の内外に敵なきに至つて、彼は初めて天下の最強者となる。天上天下唯我獨尊となるのだ。自主自由の人となるのだ。

彼は超人であり又適者である。天才や英雄は人格の不具者である。然るに彼は圓満なる人格者である。圓通自由の完人である。

超人たるの彼は、輿論や流行の上に嶄然として頭角を擡げ、適者として居る。彼の如才なく實世間と握手し之を利用して富有に幸福に生活して居る。

眞人には實に人格の獨立と自由とがある。喜怒哀樂は全然外界より獨立して居る。境遇の順逆に依つて悲喜しない。得失を以て苦樂とし

ない。彼には儼乎たる主觀の天地がある。風吹かば吹け、雨降らば降れ、外界には如何なる變化あらんも彼の心池は清澄鏡の如く、小波一つ起らない。莊子の所謂之を制する内にありだ。茲に至つて彼は實に神仙の域にせまるのである。

彼は又自然の人である。自然の法則には甘んじて従ふのである。故に彼は無病長壽である。

要するに人間發達の極致は真人である。人生に於ける眞の成功者は必ず真人でなければならぬ。

○ 引 力 の 説

宇宙の力は總て凝集と離散との二方面に働いて居る。物の成るは凝集の力で、物の破るるは離散の力だ。物質分子は各々この二傾向を具へて居る。物體の境遇上、求心力が遠心力に勝つた時には、物體は存在を續ける事が出来るし、遠心力が求心力に勝てば、物體は破れるの外はない。

人間の生は凝集により、死は離散に依るのである。

健康體は凝集力強く、病體は離散力が強い。健康體の強固で、病體の柔軟なものも畢竟この理である。軀幹鐵の如しと云ひ、身體が綿の様に疲れたと云ふも此理である。

兩力が貨財に働いては集つて富を成し散じて貧となる。富は人格の

引力に依つて引き付けたもので、貧は斥力に依つて來る金を追ひ出したものだ。

政治家などの人望も引力の結果だ。學者が知識を集めるも引力だ。世界は引力の競争である。大は天體の引力より、小はパチルスの引力迄互に力を角して居る。人間でも大引力者は小引力者を引き付けて居る。大引力者は小引力者の所有物を奪ふて愈よ大引力者となる。かくして富は益す富に、貧は愈よ貧である。強は愈よ強に、弱は益す弱である。

引力は歸する所各人の要求である。要求大なれば志も亦大に、志大なれば引力も亦大である。吾人は大引力者となるの前、まづ世界に向

つて大要求をなさねばならぬ。

○文明苦

文明社會はもとく人間の自衛發展の爲に作られた。原人の時代に當つて風雨猛獸の害より免れんとして家屋が出来た。寒暑を防がんが爲、衣服が出来た。こは素より適當な自衛の産物である。原人は自衛と共に發展攻撃の器具を作つた。刀槍等は之である。是れ即ち人類最初の文明であつた。人間が天地間に於て戦ふべき運命を授つて生れたからには、自衛發展の文明は是非共必要である。

如何なる場合に於ても人間は、到底實用のみを以て満足しない動物

である。又誠實のみを以ても満足しない動物である。かくして文明の進歩と共に、漸次装飾や趣味や、虚偽や懸引や、所謂今日文明の弊なるものは續出し來つたのである。

單純な娛樂は段々複雑になつた。其刺撃は強烈になつた。不健全になつた。之が爲金錢と時間を濫費するやうにもなつた。この爲に種々の病氣を生じた。道徳上、法律上の罪人も生じた。

性慾の如き、原人時代には、之を娛むの度は、頗る淡いものだつたが、今日では専ら酒や顔料香料に依つて淫樂を亢進して居る。

食品なども今日では養分の皮を剥いで粕ばかりを調理して居る。

文明人の願ふ所は幸福よりも名譽である。安心よりも虚榮である。

彼等は悉く近眼である。根本を見ずして枝葉を見て居る。かくして彼等は些々たる名譽のために墮地獄の苦を嘗め、非常な不安を冒して虚榮の夢を追ふて居る。嗚呼笑ふべきであるか、將た悲むべきであるか。

今日の禮儀は赤誠の表徴でなく、虚偽の印だ。媚諂の言ひ合ひだ。

文明の暴君は輿論と流行である。之に従ふものも亡び之に逆ふものも亡ぶ、従ふ者は社會的榮進は出来るが、自然の復讐を受けて、生理上の破壊に終る。逆ふものは職は剝かれ、名譽は奪はれ、妻子離散、流難困敗、社會の門より出しを食つて乞食の境涯に落ちねばならぬ。

文明は不自然だ矛盾だと呼號するものはある。然しその呼號に依つて文明社會の一小部分の改められた事を聞かない。文明は之等の攻撃

を屁とも思はず、巨人の如く、大踏歩して益す不自然、矛盾、

間の頭に加へて居る。

朝に得ざれば山林のみと激語し得たのは、實に韓愈以前の事だ。況んや今日の如く文明の手が到る所の山村水廓に及んで、自然兒の爲尺寸の地を餘さざる時代に於ては、吾人にして一朝社會を捨つれば、終に生存の地なきに至るのである。

文明苦脱離の方法として、支那に於ける道者仙人の如く山林に遁れて獨全を計り、天壽を完ふする者、ニーチエー、トルストイの如く文明を咒つて悶死するもの、其他尙澤山あらうが、これらの方法は決して文明苦の免れる良法でない。前者の不可能は云ふ迄もなく、後者も

單に鬱散の手段と云ふ丈で、この爲に文明社會はビクともしないし、

第一そんなに心身を苦しめる必要はない。

如何に文明が不自然だから、苦しいからと云つても、かく云ふわれ自らは文明の搖籃に生長して來たし、自己の祖先も數萬年來文明のお世話になつて來て居る。到底遽かに文明から脱離する事は出來ない。

文明を離れ得ぬ事が分れば、寧ろ之と握手するが賢明である。或點迄はこれと調和し之を利用し、自らも文明に利用される。然し文明の大害と認むる所には斷じて接近せず、即ち足は文明社會を踏めども、頭は高く白雲の上に出で、自然の大氣を呼吸する事に努めなければならぬ。是れ實に理想的方法である。

○先天無責任論

吾人は意志の自由を知る。吾人は境遇と教育及修養の力の頗る侮るべからざるを知る。然れども是等以上に遺傳の力の人間運命の大部分を支配する事を否定する能はざる也。

遺傳とは即ち母胎を通じて、祖先幾十年の血液及細胞の傾向を傳承するの謂也。斯くして個人には個人の遺傳あり。國家には國家の遺傳あり、民族には民族の遺傳あり。人類には人類の遺傳あり。邦人が短軀にして漆黒なる髭髮を有し、伶俐にして勇敢なるは、畢竟するに我祖先の體格資性を傳承する所以にして、人種の別も人類の獸性も何

れも其祖先を語らざるなし。

吾人の遺傳は獨り原人時代の細胞を繼承するのみならず、人類發生以前地球成形の前、混沌の世界より其素質を傳承し來れる事疑ふべからず。如斯無始以來の遺傳を僅に五七十年間に於て全然改造せんは到底不可能の事なり。遺傳は先天の約束たり又束縛たり。人類の微力を以て到底斷絶し得べきに非ず。

氣力世を蓋ひ、人生不可能無しと叫びたるナポレオンすら、終に胃癌の爲に倒れたるに非ずや。其他英雄豪傑の士にして遺傳に累せられたるもの枚擧すべからず、英雄にして既に然り、斗屑の輩に至つては、滔々として遺傳の奴隸たらざるなし。

遺傳の良否は實に吾人の運命をトすべき唯一の指針たり。若し夫れ吾人にして祖先より氣力と美貌と健康と善心と而して能力と是等の全部を譲られたりとせんか、之れ實に無上の天恵にして、其幸福の大なる百千萬圓の遺産に勝るや必せり。宜しく福運の神に向つて、其神寵の厚きを謝せざるべからず。又若し是等の半數を遺傳せられたるものあらば、之れ即ち中運の人にして、彼は寧ろ其努力の餘地裕かなるを祝福し、其善遺傳を利用して、惡遺傳の改造に努むる所なかるべからず。若し夫れ是等の何物をも遺傳されざるものあらば、之れ實に天下最大不幸の人のみ。その後天的修養により如何に努力するも、終に何等の成果を見る能はずして止まむ。

凡そ責任なるものは自由意志の産物なり遺傳の如き、自由意志の如何ともし難きもの、少くとも自由意志に依りて其全部を變化し得べからざるものは、到底責任を議するの途なし。

世の智者と云ひ、手腕家と云ひ、成功者と云ふもの、十中八九分迄遺傳の力に負ふ事を知らざる可からず。

又世の愚者と云ひ、無能者と云ひ、落伍者と云ふ者の十中六七分迄は天賦の薄きに基く事を知らざるべからず。然るに社會の是等を目するに全然遺傳を度外視し、成功者を讚美するに當つては、彼等の今日ある全く其努力の賜なりとし、落伍者の七顛八倒するを見ては、唯冷笑を以て之を迎え、其不熱心を咎め、其不甲斐なきを罵る。何ぞ其觀

察の淺薄にして不徹底なるの甚しき。

要是、人生の事、遺傳は十中の六七に居る。努力は僅かに其三四に居る。成敗を論ずる者は、先づ其遺傳に着目せざるべからず。

○人格の型を破れ

人格の型は要するに文章の型と同じである。文士が其作物に對して千偏一律の調子で執筆すると、終には總ての文章が同一の型に窺つて了ふのと同様に、吾人が單調な生活をくり返して居るうち何時の間にかやら人格の型が出来てしまふのである。地方人が何時見ても同じ顔で同じ氣分で居るのは、之は人格の型に囚はれて居るからである。都

會人は生活の必要に迫られ、且又四圍の刺撃に應じて常に人格の型を破つて居る。都會人が二三年も見ぬうち見違へる様になつて居るのは、畢竟是が爲である。

消極的に考へると、此型を破ると云ふ事は要するに生活状態の一變であるから、素より多少の危険はある。精力の浪費もある所有物が無くなる。力の收獲が見られなくなる。手堅い地方人が無味乾燥な單調生活に甘んじて、何等生き甲斐のあつたといふ事もなく、冷たい墓穴に葬られてゆくものにも又相當の理由はある。然れ共少し積極的に考へてみると、吾人が時に撓まんとする元氣を振起し、燃ゆるが如き活動欲に驅られて、猛進の出来るのは、要するにその際幾らかでも人格の

舊型を破つたからである。又事業の進歩が人格の進歩より来るものとすれば、事業の発展を見んとする者は、まづ人格の更新を計らねばならぬ。

尙一層根本的に考へると、生と云ふ事は要するに程度の問題である。同じく生物でも草木の生と動物の生とは、全然その生きかたが違ふ。獸類と人間ともその通り、同じく人間でも壯年は潑瀾として眞に生きてると云ふ感を與へるが、老耄した人を見ると、あれでも生きてるかと思ふ位である。同一人でも朝と晩とは生の氣分が違ふ、湯上りとか冷水浴の後とかは全て別人の様な生の感が染々と全身に充ち亘るのである。

吾人にして眞に生きたと云ふ感を味はんとせば、時々生活の單調を打破しなければならぬ。生活の單調を打破するのは即ち人格の型を破るのである。何事にも犠牲はある。人格の型を破るにも素より多少の危険と損失とは免れない所であるが、之れ位の事は忍ばなくては、到底生の實感に觸れる事は出来ない。

○自己改造の理想

自己とは何ぞや、自己とは即ち遺傳の素質に幾多の陶冶鍛鍊を加へたるもの是れなり、遺傳にして努力の外に立つ以上、吾人如何に努むるも、到底自己全部の改造を爲すべからず。吾人理に於て、自己改造

の不可能を知る。然れども吾人は衷心の要求として自己改造の理想を全然拋棄し能はざるを奈何。

吾人は居常學識と經驗の不足より、大小幾多の失敗を重ねつゝあり。失敗は要するに樂きものに非ず。茲に於て乎吾人は失敗に對する自衛上、新智識と新經驗を得て、比較的完全なる人格に到達せんことを望む。謂ふ處の自己改造の努力とは是れ也。

自己改造と云ふと雖、素より其全部の改造に非ず、即ち或は知識の方面に於て、或は意志の方面に於て、或は身體、或は品性の方面に於て能ふ限り多くの欠點を除き比較的圓滿なる人格たらんとするなり。之が爲には先づ銳眼を以て、自己の缺點を知り、不善は如何に微小な

りと雖、斷じて是を爲さざるを期し、善事は如何に微小なるも必ず之を爲すべきを期し、隱忍して努力せば遂には高貴なる品性を得べし。かくして品性の方面に於ては吾人は自己改造の理想を殆ど成就し得れども、其他の方面は例へば能力才藝等の方面に於ては、到底所期の半ばだも達する能はざるべし。是れ畢竟前者は後天的の修養に待つ所となるに反し後者は殆ど其全部が天分に依つて定るものあればなり、催眠術に於ける人格轉換の如き、品性方面の改造にして、才藝の方面に於ては何等の變化を見ざるが如し。

要するに自己改造は人類共通の願望なり吾人は此理想を追求する事に依つて、初めて人格の光輝を發すべきなり。

○ 圓 く な れ

福徳圓満

とか、圓轉滑脱とか云つて、人間修養の理想は圓である。單にそれのみでない、天然の物は何でも圓い、日月星辰は素より動植物みな圓い、所謂圓ではないが、圓みがある。林檎も圓い、石も圓い、人間の體も圓い人巧の加らない天真の自然物は何れも圓だ。故に古來の

宗教家、哲學者

は世界を圓だと見た。近い所でも二宮尊徳や黒住宗忠など神の本來をマルと云つて居る。人間の精神も圓いのが宜い、修養の積んだものを圓熟圓成と云ふ。世渡り上手を圓い人と云ふ、吾々が學校で勉強するのにも處世上種々苦心するのにも矢張り圓くならんとしてである。元來圓は圓滿と云つて、次げた所のない相である。學問なり、人格なり、世才なりに於て缺點のある中は、決して圓とは云はれない。缺けて居るのだ。吾人は

種々の境遇經驗

を重ねる事に依つて、又は深く反省する事に依つて、自己の缺けたる事に氣付く。缺點の自覺は不平不満となりて現はれる。不平は發奮となり、發奮は勉強を伴ふて刻一刻圓の理想に近よるのである。圓い人が巧妙に世渡りするのは、恰かも荷車や汽車、電車の車輪が

音もなく滑かに

レールの上を走つて行く様なものだ。物理上でも圓は他物の抵抗力を削ぐ。精神の圓、言葉の圓、身體態度の圓何れも他の抵抗反對を和める力がある。然し小さく圓いより、大きく角のある方がよい事もある。何故となれば、大物の角をとれば、大きな圓が出来るからだ。天生角なく缺點のない者は幸福である。然も聖人と雖、生れ乍ら決して圓滿なものでない。三たび

肱を折つて良醫

となる、醫者の學問だけでも、仕上までには容易な事でない。況んや人格の圓滿を期せんとせば、宜く十たび廿たび肱を折て切磋琢磨の

必要がある。

○駄の字の世

凡て世の中で

駄の字の付くものにヨイものはない。無駄、駄馬、駄目、駄羅仕な駄文、駄辨。こんな工合に詰らんものには皆な駄の字が付く。駄の字は單に詰らんと云ふのみでなく、贅冗と云ふ意味もある。一例として

駄文と駄辯

とを見よ。何れも山鳥の尾の長々しいが、少しも要領を得ないもの

だ。馬でも駄馬と云ふ種類は、冗肉がムクくと四肢五體にクツ付いて居る計りで、その歩行、牛よりも遅いものだ。無駄と云ふのも、必要以外の餘計な事だ。今の世の中を

見渡して

見ると、駄字の付くものが横行して居る、まづ今日の生活を見よ、衣食住は素より禮儀作法迄無駄な事のみ多いではないか。無駄とは云ひ換へれば、効能のない複雑である。文明が複雑を産むは争はれない事實であるが、然し無駄な所にまで金錢と時間と精力を費して、心身の害許り計つて居る。誰でも云ふ事であるが

煙草、酒など

其一例で、殊に酒はその尤も甚しいものだ。今日、何か會合がある、必ず酒が出る。會は付けたりで酒を呑む。今日、我國の財政は必需品迄切り詰める様な遣り方であるが、それより何よりまづ個々人の禁酒節酒から斷行して貰ひたい。眞に其實行が出来たなら

國民の富力と體力

との上に何れ程の好結果が得れるか分つたものでない。こうなれば何も減税などの必要はない。まだくイクラ増税をしてもよいのだ。今日我國の禮儀、習慣など云ふものも、随分馬鹿くしい

不合理的な

従つて非衛生的なもの許りである。例へば正座の習慣なども、身體

下半部の血行を阻み、殊に肛門に於ては静脈の鬱血を來し、種々の痔病を發する事になる、日本人に痔の多いのは正座の罪だ、裂痔、疣痔などは未だ軽いが、肛門癌になると、全く不治症だ。こんな難病の生ずるのも

根本を叩けば

矢張り無駄な禮儀作法の罪である。今は又駄文、駄辨の世の中である。社會の機關が複雑になればなる程文章や言葉は成可く簡單にして時間と精力を省く様にしなければならぬのに、却つて無駄な言文を費して居る。

氣が知れないとは

此事だ、往時ラコニックと云つて希臘人のやつた様な、今日科學者や事務家がやつてる様な極々切詰めた簡單明白な言文を使用すべきである、簡明な言文動作は、整理した頭腦より生ずるとせば、吾人は今日言文の末節に拘る事なく、頭腦の整理鍛練より初めねばならぬ。吾人は切り詰めた剃刀の様な思想を以て複雑な現代、駄の字の世を征服せうと思つて居る。

○流行の弊

流行を追ふの愚は今更

云はでももの事であるが、近來流行カブレの人が多くなつたのは嘆は

しい。流行とは一體どうしたものか、法律の様な厳しい制裁力を持つて居ない事は事實であるが、然し社会的制裁力はある。流行に従はぬと、

△△△△△
社會の非難

が起る。その結果は當人の信用は素より職業にも關係してくる。流行に壓迫せられる結果、安んじて職業に従事して居られない事にもなる。實に流行は小面憎いものである。さればこう云ふ流行を誰が拵えたであろう。一言にして定義すれば、流行とは

△△△△△
その時代

の大勢力が生み出すものである。この道理は日本の歴史を見ても、

能く分る、奈良、平安朝は公卿の盛な時代なので、其流行も總て柔弱な公卿風であつた。鎌倉時代に於ては、武士全盛期だつたので、其流行も頗る武張つたものであつた。維新當時から

△△△△△
明治の初年

にかけては、書生、壯士の全盛時だつたので、其時の流行はサツパリした書生風であつた。然るに日清役後此頃へかけての流行は一體どうしたものか、男女共、柔弱で、輕薄で、淫靡で、奢侈で、何ともお話の出来ぬ次第だ、こう云ふ流行の出来るのも、畢竟現代に一番巾を利かして居る。

△△△△△
藝者と役者

に依りて一代の流行が産み出されるからである。近來は藝術家とか、何とか云ふが、然し露骨に云へば賣春婦と男地獄、若くは下等藝人の一群に過ぎぬのではないか、一體こう云ふけしからぬ現象を呈するものも、現代の

批評家や

紳士が無暗にかれ等を持ち上げたり、彼等を愛用するから、自然彼等に勢力を占めさす事にもなるのだ。政府が如何にヤキモキ云つて財政上の遺縁をしたり、二宮宗に力瘤を入れても

時弊の根本たる

流行の源泉から一掃せなければ駄目である。小さくこれを家族の上

から云つても、流行のために如何に多くの家庭がその犠牲となつて、如何に悲惨なる運命に遭遇して居るか、上流は兎も角、中流以下の犠牲は非常なものである。流行の爲には

食ふ物も食はず

に苦んで居る者もある。子を捨てる者もある。夫婦別れをする者もある。財産を棒にふるものもある、首をつつて死ぬるものもある。堂々たる人間一匹が流行の奴隷となつて、喜憂生死一切を流行にゆだねるに至つては、實に何とも

情ない話で

ある。吾々が人間として間違のない立派な生活を営むに、何も流行

に囚れる必要はない。吾々にして眞に男らしい生活を營まんとせば、宜しく流行を超越すべしである。田尻北雷博士の様に全然流行には無頓着なるべし。かくして初めて心ひろく、體ゆるやかなる眞實の生活が出来るのである。

○牢獄を出てよ

人は生れるとから

習慣と云ふ糞溜の中へ漬つて居る。人は生れた時には清淨無垢であるが、糞溜の中へひたつて居るうちには、矢張りその身體へは臭氣がうつる。世は進んだと云ふが、矢張り古い習慣はある。例ひ何萬年た

つても此習慣の糞溜から脱する事は出来まい。人間の自然性は決してこんな脆弱なものではない。

寒暑其他

もろくの苦境に堪え難いと云ふ事はない。強く生れた人間を弱く育てるのは、みんな習慣の故だ。父母は自分の育てられた様に子を育てる。少し寒いからとて綿入を着せる、少し暑いからとて日傘をさす。自然のホドに捨て置きば子供の體は自づと外界の天候に順應して、薄着のまゝで、日傘もささず充分凌いでゆけるのに、父母は古い習慣で

子供を保護せう

と。して。却。つ。て。其。身。體。を。弱。く。す。る。佛。教。に。識。と。云。ふ。事。が。あ。る。寒。暑。甘。酸。の。感。な。ど。が。そ。れ。だ。然。し。今。日。の。所。謂。寒。暑。甘。酸。は。習。慣。が。生。み。出。だ。した。妄。念。で。あ。る。五。官。が。あ。る。以。上。感。覺。の。生。ず。る。は。當。然。で。あ。る。が。然。し。こ。れ。も。鍛。練。の。仕。様。一。つ。で。決。し。て。今。日。の。様。な。神。經。過。敏。に。は。な。ら。ぬ。自。分。は。數。年。來。冷。水。浴。其。他。諸。種。の。方。法。に。依。つ。て。心。身。の。訓。練。を。や。つ。て。居。る。が。其。お。蔭。か。年。來。風。邪。一。つ。引。か。ず。大。概。の。寒。さ。は。袷。一。枚。で。凌。ぐ。裸。で。一。二。時。間。居。つ。て。も。そ。ん。な。に。寒。い。と。は。思。は。ぬ。

之等ハ訓練ノ

初。歩。で。あ。る。が。印。度。の。婆。羅。門。僧。に。な。る。と。實。に。慘。烈。な。修。行。を。す。る。修。行。の。結。果。全。く。五。官。を。殺。し。て。終。つ。て。大。自。在。力。を。得。る。と。し。て。あ。る。吾。人。が。

悟。の。境。に。入。れ。な。い。の。も。畢。竟。吾。々。が。官。能。の。世。界。に。居。つ。て。種。々。の。妄。念。を。起。す。か。ら。だ。一。た。び。發。憤。し。て。官。能。を。た。ち。妄。念。を。殺。し。て。了。つ。た。な。ら。吾。人。は。茲。に。悟。の。世。界。に。入。つ。て。大。自。在。力。を。得。る。吾。人。の。生。活。が。複。雜。で。從。つ。て。不。安。に。滿。ち。て。居。る。の。は。畢。竟。吾。人。が。五。感。に。囚。へ。ら。れ。習。慣。の。繩。に。縛。ら。れ。て。居。る。か。ら。だ。

雪ノ降る日は

寒。く。ぞ。あ。り。け。る。と。西。行。は。詠。じ。て。居。る。が。然。し。雪。の。日。が。寒。い。様。で。は。ま。だ。く。習。慣。に。囚。は。れ。て。居。る。吾。人。に。し。て。眞。に。大。安。心。大。快。樂。大。自。在。力。を。得。ん。と。す。れ。ば。必。ず。五。感。を。鍛。練。し。て。習。慣。の。牢。獄。か。ら。免。れ。ね。ば。な。ら。ぬ。

○人間の利用慾

ころんでも只起きぬ

と云ふ事がある。これは所謂利用慾と云ふもので、單に我利く盲者がやる許りでなく、多少は誰でもやつて居る。では何故利用するか、自分を幸福にしたいからである。利用慾は即ち幸福慾の方便である。では

幸福慾とは

どうしたものか。幸福慾とは一切諸慾の歸趣である。生きたいと云ふ慾死にたいと云ふ慾、食ひたい慾、着たい慾、財慾、色慾、名譽慾

其他種々なる慾があるが、然し之等はみな自分を幸福にしたいからである。即ち幸福慾の方便である。幸福慾の事は是れ位にして、人は自分を幸福にしたいがため

天地萬物の

利用といふ事を覺える。利用とは自分の周囲にある萬事萬物を自分の都合のイ、様にする事である。天地の事物は人間とは全く没交渉で存在して居るから、甲助の畑へは草はズン／＼生えてくる、乙吉は試験間際に病氣になる。こんな時に天道是非乎など、嘆息するのは

愚の骨頂で

ある。雑草は根抜いて、肥料にするし、病氣の時には試験は犠牲に

して、精神の鍛練をする。一たび利用眼を開いて天地に向へば、萬事萬物みな利用すべしで、敵も變じて味方となる。然し茲で一寸注意せなければならぬのは、如何に利用慾が盛であつても、その事のため、決して他人の利權は冒してはならぬ。これは道德の罪人にもなるし、時宜に依つては法律の罪人ともなる。先日の新聞に

瀆職事件

で入獄した荻野代議士が閑に乗じて一日三百枚の讀書を日課としたとある。間違つた精神の基礎に立つた修養が何れ程役立つかは疑問であるが、兎に角この一事によるも人間の利用慾が時と場所とに關せず如何に盛んなかが分る。吾人はその利用慾を善導するによつて、生活

を幸福にする事が出来る。

○冷飯舎の記

郷里の土佐

では、「冷飯は末子に食はせ」と云ふ諺がある。然し醫師に云はすと、冷飯が却つて消化しやすいと云ふ事である。支那で胃癌や咽喉癌にかゝる者は十中八九分通り熱食者であるさうな。支那の習慣として男が先きへ熱飯を食ふ、女は後から冷飯を喰ふ。

其結果を

みてみるに、熱飯を食ふ男の方に胃癌や咽喉癌が多く、婦人には殆

ど見られないさうだ。西洋でも胃癌は熱食品の試食をするコックに多いさうである要するに

癌の原因

は熱いもの、濃いもの、辛いもの、刺撃物を連用するにある、酒、煙草は勿論、熱湯、熱茶、熱飯みなわるい。酒仙の中江兆民や、茶人の尾崎紅葉やはみな癌で死んだ、近く又酒黨一方の旗頭たる鳩山和夫氏も癌で死んだ。癌が上流社會に多いのも、畢竟紳士社會には酒や熱飯に接近する機會が多いからだと思ふ。自分は由來大の熱飯好きであつたが、この事を知つてから、斷然冷飯黨になつた。朝でもワザ／＼飯を冷まして食う。汁もその通り。初めの中は非常に不味かつたが、

食ひなれてからは、却つて冷飯の方が

うまくなつた

單に飯に限らず、眞の味は、冷たいものにある、肉でも野菜でも眞にうまく食はうとすれば、冷めてから食うに限る。熱い食品は味神經を麻痺さすのである。味を胡麻化すのである。眞正の味が分るものではない。酒、煙草、茶、芥子その他の刺撃物はこれ亦

味神經を

麻痺せしめ、爛らすので、初めから誰れでもうまいと感じる者はない。連飲連用するにつれて味神經がその刺撃になれるの結果、何んだかうまい様に感じてくる。丁度痘痕が笑靨に見えてくると同じである。

人よ、汝等にして誤れる文明の桎梏より脱せんとせば、宜しくまづ

赤兒に歸れ

そして天地萬有を自然まゝに感ぜよ良薬口に苦しと云ふか、薬即毒だから苦いのだ。うまいものに毒はない。只誤らざる官能の導く儘に飲食し言語し行藏して健全なる生活をなせ。

余が冷飯舎に於ては、一切の熱物と刺撃食品とを禁じてある。その結果一家は胃腸身體の壯健を得て茲に新活動の源泉を得た。熱飯黨諸君子以て如何の感かある。

○滅び行く人

禁酒の廣告

を思ひだした様に何回ともなく出すが、出して一月と経たぬうちに、直ぐ禁を破つて、もとの大酒家となる。世間ではウフ又彼がと一笑に附して居る然し笑ひ所ではない。此様な人こそ實に憐むべき情の犠牲である。彼が二日酔をした時には必ずヒドク後悔し今度こそはと思つて居るが

宴會で盃を

だされると、二三回の押問答の末、飲む事になる。果ては大酒、亂酔舊に優るとも劣らぬ事となる。何故彼は斷乎として禁酒しないか、意志が弱いからだ。飲みたいといふ。

感情にまける

からだ。こう云ふ人は酒に弱いのみでない、萬事が受身になる。世間に負けてゆく。遂には心身の墮落、破壊となり、病氣と債鬼に責められて、信用と職務を失ひ、トのツマリは一命をも亡ぼす事となる。可愛相なものだ。こう云ふ人間は

生存競争の

劣敗者であつて、何時かは滅亡すべき運命をもつて居る。二三日前の新聞に栗一升の窃取と七十何錢の陶器の騙取で懲役一年にやられたものがある。これ等も憐むべき感情の奴隷である。之に反して随分悪い事もするが、然し意志と智識との秀でた者がある。現代で威勢よく

羽振りをきかせ

て居るのは、この種類の人物である。容易に泣きも笑ひもしない、只鐵の如き意志と、不斷の注意と計畫と、そして敏捷にして撓みなき活動によりて蓄積運用し、絶えず勢力圏の擴大を計つて居る。政治界實業界で大巾をきかせて居るのは、みなこうした人物である。

現代の優者、人物、英雄

はみなこれだ。成功術は教えて曰く「守るには堅かれ。攻むるには疾く強かれ。思慮は周密なれ、決断は敏速なれ、健全なる心身を以て財力を集め、朋黨を作つて、不斷の活動をなせば、何時かは大なる成功を得る。大勢力家となれば蓄妾も飲酒も其他の貪欲も何れも其身を飾

る愛嬌となる。あゝ幸福なる現代の寵兒よ。あゝ不幸なる現代の犠牲よ。この目醒しいコントラストは現代史の有する唯一の特色である。

○悟心と事功心

凡そ世の中

で尤も際立つた二種類の人がある。第一が悟の人で、第二が事功の人である。宗教家、哲學者などは前者で、政治家、實業家などは後者である。前者は天地萬有の理に通じて合理的な生活をして居るし、後者は道德や衛生の道など、全く眼中に置かずして只管富と名と

事業とに

熱中する。悟心の人とは頗る質素な生活をして、道理の研究に身を委ねるが、事功の人は之に反して非常に華奢な生活をして酒色に溺れて生活などは無茶苦茶である。こんな工合に截然二分せられる場合があるが、普通には、之等二つの素質は

一人の精神に

混在して居る。で悟の人と云はれる僧侶の中にも、随分娑婆氣の勝つた者もあれば、實業家などに、禪學をやるものもある。現に吾々にもこの二素質がある。大に意氣込んで社交に努め、度々酒席に出る。飲む時には

お目出度なつて

手を拍くが、宿酔でもして頭痛鉢巻となると、サア後悔だ。飲まなければよかつた。飲むには飲んでも拳などは打たなければ可かつたにと切りに悔む。初めは事功心に驅られて社交大事と、大酒を呑んだが、酒の害が形はれてくると、茲に初めて悟心が出る。其瞬間に於ては實に

聖人君子だ

吾人は何時もこうした氣持で居なければならぬ。事功心も必要であるが、之が餘り跋扈すると身を危くする。吾々は常に事功心を以て悟心の下に置いて、萬事其指揮に待つ様にせなければならぬ。かくしてこ

そ初めて理想の人間が出来上るのである。

○強き善人

從來の定義

に依ると、善人と云ふ者は、單に消極的に悪事をせぬ人をいふ様である。所謂蟲も殺さぬ善人である。然し將來の世に處して、こう云ふ種類の善人では、到底やり切れるものではない。今の世は

強き者勝ち

である。悪人でも強き者は、随分競争に勝つて、優勝者の地位に立つのだ。如何な善人でも、何事も引込思案で、社會に負けてゆく様で

は、到底何時迄も社會の下層に壓迫されて居なければならぬ。

△△△△△
今後の善人

は是非共強き善人でなければならぬ。強き善人とは、善人であつて、
そして強者でなければならぬ。消極的善人ではなく、積極的善人であ
る。單に爲られない事をせないと云ふに止めず、爲す可き事を強くし
て行く、道徳も茲に至つて、初めて其價値を

△△△△△
遺憾なく

發揮する事が出来る。弱き善人より強き悪人が勝つてゆく世である。
然し將來は決してこんな間違つた事が續くものではない。必ずや強い
善人が出て、強い悪人を壓服する事にならう。時代は強き善人を要求

して居る。管公の様なのは、昔時の善人である。然し將來は時代に壓
迫されてオメ／＼夫れに従つてゆく様な善人では駄目だ。消極道徳を
守ると共に積極道徳も進んでやる様にし、善人にして、しかも強者たる
事を心懸ねばならぬ。かくしてこそ初めて現代に適應する事が出来る。

○正道と權道

△△△△△
一日に晝夜

があり、物に表裏があり。道路に本道と間道とがある様に、吾人日
常の行爲にも、また正、權の兩道がある。子として親に孝行を盡すは
これは人倫當然の事で、即ち正道である、然るに親が一朝謀反人とな

つて

君に弓を彎

く様な事でもあれば、親だと云つて其儘にさして置く可きでない。大義親を亡ぼすとは此事である。太平記などには此例が多い。眞面目に世渡りをするのは正道である。然し時として交際のために茶屋酒の一杯も吞まねばならぬ事もある。之は即ち權道である。

漢學全盛

の時代に、奇問を發するものがあつた。それは今若し孔子が孟子以下の弟子を引き連れて攻め寄せて來たとすれば、諸君はどうするかと云ふのだ。孔孟の糟粕許り嘗めて居る先生達は何れも此奇問に吞まれ

て、誰れ一人、返答をする者がなかつた。然るに荻生徂徠であつたか、大聲を發して

孔孟の軍にして

日本皇室を犯すが如き事あらば、遺憾此上なければ、我國には代え難し、小生大刀を揮ひて孔孟を斬つて捨てんと云つた。流石は徂徠、其見識は實に見上げたものだ。孔孟を尊敬するは漢學者の正道常經であるが、然し非常の場合には、儒教そのものをも捨てて顧みぬと云ふのは、之れ即ち權道である。

變幻究りなき

人生にあつて、單に正道常經にのみ拘泥して、權道の活用を知らざ

るは、是れ畢竟腐儒の事である。兵法にも正兵と奇兵とがある。多端なる人生に於て到底論語一點張りではやり切れるものではない。臨機應變の處置を取らねばならぬ。禪學などは此間の消息を道破したものである。

○運命の自由

若し我々が

前途の運命にして、一定不變のもので、人力を以て如何とも變動の出来ないものならば、人間と云ふものも、誠に詰らないものである。然し實際はそう云ふものでない。若し吾人にして一切努力せず、活動

しなかつたなら

我々は自然社會

のなす儘にならねばならぬ、丁度急流へ身を投じたと同様である。我々にして泳がない以上、必ずや川の流れに従つて下へくと流されるに定つて居る。然し何んな人間にも多少の意志と夫れに伴へる活動とがある。我々が

意志的活動を

最も明確にやつて居れば、吾人の運命は吾人の意志次第で、善悪どうでもなる。全く自由である。自分は將來天晴大善人にならうとする。然し不幸にして、其時になつて思ひ通りの善人になれなかつたと

すれば、夫れはまたく、努力が足らなかつたからだ。

△△△△△△△△
大學者にならう

とする、然し中途にして不幸病のために倒れたとすれば、それは其人が衛生に充分注意しなかつた罪である。吾人にして各方面に向つて全身的努力を試むるならば、吾人は思ひのまゝの運命が得れる。然し茲に「業」と云ふ事を見のがしてはならぬ。業とは一口に云へば、

△△△△△△△△
現在の自分

を造つた原因である。吾人は男と生る可くして男と生れて居る。今遽かに女にならうとした所が、到底女になれる譯のものではない。天性の馬鹿が如何に努力しても到底大學者、大政治家となる事は出来ぬ。

然し努力さへすれば、分相應には熟する。鳶が鷹にはなれぬが、然し

△△△△△△△△
鳶の中では

イ、鳶になれる。それで吾人には運命を全然自由にする丈の力は無いが、然し運命の幾部分は儘に自由にする事が出来る。若し人間に運命を自由にする力が少しもなかつたならば吾人は遂に一個の製糞機として五十年を空しく送らねばなるまい。

○ 快苦を意とせず

△△
人間は△

實に馬鹿なものである。快樂を追ひ、強ひて不正不義の快樂を充すがため、常に幾多の苦悶を嘗めて居る。佛者は云ふ。生あれば茲に死あり、人にして死の苦を脱れんとせば、宜しく不生の覺悟をなせと。快苦の關係も之と同じく、快あるが故に、茲に苦がある。茲に

大悟の人が

あつて苦樂を一枚とみ、不苦不樂の境に安じたなら、初めて安心立命の地に落ち付く事が出来る。自分は苦樂を度外に置いて居る。來る苦を拒まず、去る樂を逐はず、常に苦樂以外の天地に悠遊して居る。顔回の境過にあつて富貴榮達を願へば、煩悶も苦惱もあつたに相違ない。然し回は

一瓢の飲一簞の食に

甘じて居たから、常に清貧に安じて居た。然し清貧を目的とするには及ばぬ。只自己の本職を一生懸命に盡して、向上の一路を辿り、富貴榮達が來れば、之を受け、貧賤來れば、貧賤の境遇に安ずる。是れこそ真に

大丈夫の

心事である快苦の間に浮沈して一生を終るは、是れ畢竟匹夫の事だ。酒や烟草は甘い。然し其中毒は、吾人を不具にし、廢人にし、遂に死せしめずんば止まない。酒。煙草の害は明白な事實だ、この明白なる事實を無視して、單に一時の快樂を得んがために、身を犠牲にして悔

いない。何たる馬鹿ぞ。大臣になりたい、富豪になりたい、然し之は空想だ。こんな空想に耽る時間があるなら

裏畑へ鋤一つ

打ち入れるが、遙かに有益である。私にも理想はある。が大臣や富豪など云ふそんな吝々したものでない。吾輩の理想は完全な人間になる事である。この理想を實現せんがためには、如何なる苦痛も辭せぬ、又如何なる快樂も辭せぬ、快苦は全く眼中に措かずして、一意に修養を積むばかりである。

○全身的努力

一生懸命

の態度ほど床しいものはない、この態度があればこそ、世の中に種々の發明も出來、忠孝の道も行はれる。一生懸命の態度とは、新造語に従へば、即ち全身的努力である。我々は全身的努力を何時迄も續ける事は實際

困難でもあるし

何時も氣が張りつめて居つては、却つて諸種の弊害がある。然し一度活動を初むれば吾人は全身的努力を試みねばならぬ。一心不亂に餘所見もせずして働かねばならぬ。一心不亂になれば、吾人の

至誠が現はれる

苟も至誠を以て事に當る以上、何一つとして出来ないものはない。至誠は鬼神をも泣かしむる事が出来る。況んや日常の事物は、何一つとして出来ない事はない。單に事務的活動の時許りでない。休憩の時も遊戯の時も、等しく一心不乱にやる。乃ち

至誠を以て

休み、至誠を以て遊ぶ。心ゆく許り休み、心ゆく許り遊ぶ、かくしてこそ初めて休息と遊戯の要領を得る事が出来る。休むからとて、遊ぶからとて不真面目にやれば、到底之等にだも成功する事は出来ぬ。況んや

人生必須の事

には是非共真面目になる必要がある。一事をなすに當つては心身全體を其方へ打ち入れて、少しも餘事を思はず。かくしてこそ初めて一事を成就する事が出来る。古來一事一能に秀いでた者は悉く此格言を守つた。何事も複雑になつてゆく現代に於て殊に此心掛けが必要である。

合理的な生活

机上に飛ん

で来た一スベの芥でも、床下に生える一本の草でも、等しく是れ天地の道理に従つて飛んで来もし、また生えもするのだ。天地間何一つ

として、天地の法則に漏れたものはない。人間と雖、天地間の一物、必ずや

此法則に

従はねばならぬ。草木には自ら意思し、自ら發動するの力がなく、唯天のなす儘に任せる。即ち天然自然に合理生活をやつて居る。禽獸は草木に較べると、意志力が何らかある丈に、合理的生活が出来なくなる。

人間になると

愁か思念や、意志の力が發達して居る丈に、猿智恵を出ていろいろ小細工をする。それで益す合理生活に遠かつて人為的の無理な生活を

する。病氣をしたり、いろいろな難儀をするのも、みんな

不合理生活

の故である。自然に背反いて、求めて不自然な生活をするからである。それなら何うしたら合理生活が出来るか、草木の様に無意識になろうか、然し人間は草木と違う。人間には意識もあれば、意志の働もある。

草木と同一

にはならぬ。我々は我々の智識を愈々磨いて、事物の本性を明らかに、而して後に夫等に適應する様に生活を仕向けて行く。人間の合理生活は動植物の夫れと違つて、人間らしうせねばならぬ。斯くして我々の

生活が合理的になればなる程、幸福の分量が増すのである。

○抛げやりにする

我々の事業

が遅々として進まぬのは、畢竟何かを抛げやりにするからである、何故抛げやりにするか、之にはいろいろ原因はあろうが、大體次の三種に分れる、第一

精力の消耗

して茫然した時、こんな時には何もが手に付かぬ。何でも抛げやりにする。之が一番悪い。體をいためるか、神經衰弱になつて、元氣の

なくなつた時は、先づ其病源から根治して何事にも愉快を以て當る事を

考へねばならぬ。第二の原因は、大切な用事が澤山ある時、こんな時には比較的大切でない事は自然忘れる。然しどんなに忙しい時でも、自分の豫め計畫した丈の仕事がやれない事はない。こんな

忘れると云ふ

のも畢竟一日の仕事を夫々時間割にしてないからだ。前の晩に翌日の仕事を漏れなく時間割にして手帖へ書き付けて置いて一番から

順々に

行つていたなら、決して忘れると云ふ事はない。抛げやりにする第

三の原因は、或仕事に對して、それを完成する迄の順序を細々と考へてないからだ。ナアに何にか行れるだろうと思つて居るが、さて愈々

實行となる

と種々の困難が起つてくる。手紙一本書くにしても文章を考へ、料紙硯がなければ書けない、況んや少し込み入つた事になると、匆卒に行れる譯のものでない。兎に角抛げやりの習慣を除かうとするには、是非非常に精力を養ふて、時間割と仕事の順序書を作つて、何時でも豫期の計畫を實行し得られるやうにしてをかねばならぬ。

○性格の研究

社會で活きた

仕事をしやうとすれば、是非共人情に通ずるは勿論、相手方の性格を熟く飲みこんで置く必要が起る。人には夫れ／＼特質がある。

十人十色で

ある。甲の相手に成功する言動が一概に乙の相手に成功する譯にはゆかぬ。甲は言動の敏捷を好むが、乙は其確實を好むとすれば、到底同一の言動で双方の

氣に入られる

事難かしい。吾人にして眞に自己の業務を圓滑に運ばんとせば、宜しく相手方と關係を造るに先つて、甲、乙、丙相手方總ての性格を熟知

常に快苦に

支配されて居る人間は、一生何等の大事業をなす事は出来ない。之等を稱して小人と云ふ、快苦を念とする小人が大事業の出来ないのは勿論

大局から云つて

決して幸福は得れない。快苦の感は多くの場合、盲目的感情の生む所である。理性の聲ではない。例へば飲酒家にとつて、飲酒は此上もない快樂である。然し飲酒は人體に大害がある

酒を呑む時

は幸福であるが、大害の襲來する時は、非常なる不幸である。差引

勘定をして、ナカ／＼追つ付く話ではない。飲酒家が酒を呑まぬのは一種の消極的苦痛である。この苦痛を避けんとして飲酒をすれば、先きの大害がくる。要するに吾人は苦樂を念としてはならぬ、苦樂を念とする程度に依つて

人格の大小

高下が分る。眞に偉人英雄は苦樂を念としない。苦樂を念とする事が、單に不幸に終るのみならず、この爲に一生詰らぬ事をして

時間を空費

する。酒が飲みたい、甘い物が食ひたい、美しい衣が着たいと寝ても醒めても、こんな事許り考へて居るから、大事の事業がお留主になる

単に時間を空費する許りでなく、金も精力も之がため

徒費される

事になる。随分天分の勝れたものでも快樂の追隨者になると、進歩が止つて、遂に詰らぬ人間に終る事となる。快樂論者は人生の目的は快樂だと云ふが、然し此快樂は人生終局の幸福で決して今日吾人の所謂快樂でない。要するに吾人は快苦を度外に置いて、一意人生の大事に向つて努力すべきである。

中庸

白刃は踏

む可し、中庸は得難しと聖人も嘆かれて居る。中庸換言すれば中和である。何でも中和がよい。冬と夏とは閉口だが、暑からず、寒からずと云ふ春は誠に心身の

伸びく

するものである。氣質でも嚴に過ぎず、緩に過ぎず、丁度其中程の温和と云ふ所が一番宜い、一番宜いが、一番少い。一年十二ヶ月の中でも、眞の春らしい季候は僅かに二ヶ月位しかない。天秤でも平均を保つ所は槓杆の眞中に當る一點である。此一點を除いては、槓杆の何所を持つても

到底平均は

保てぬ。天秤にして既に斯の如し。況んや耳目に觸れざる人事百般の中庸を得るは、實に至難の業と云つても宜い。君子にして尙且時に中すと云ふ。況して凡人の中庸を得る事は實に

至難中の

至難と云はなければならぬ。何事でも上進するは良かり相であるが、易に亢龍悔ありとある。餘り圖に乗つて上り過ぎると、必ず不祥な事に出會す。茶碗へ水を入れるにしても、一杯になると、必ず

溢れる

徳川光圀も座右銘に八分は足らず十分は溢れると知る可しとある又大慾は無慾に似たりともある。何事でも程々に爲なければならぬ、我

身の分を守り、我天分に應じて、慾も望も其程々に節して行かなければならぬ。殊に食慾、色慾、財利の慾はこの必要が切だ。

○ 軽き神經質

人間の體質

及氣質を三大別して、多血質、澹汁質、神經質とする。之等三者は何れも必要なものであるが、その極度に至ると、吾人の心身を害し、成功を妨げる事になる。何れも

適度なら

一人にしてこの三氣質を悉く備へて居るが、一番である。殊に輕微

なる神経質は、誰れも持つて居る必要がある。神経質とは世人の知るが如く、神経作用が稍や過敏になつた時で、その居措は、如何にも

敏捷である

多少怯懦の傾きはあつたが、非常に細心になつて、萬事に用心をする事になる。敏捷は吾人を積極的に活動せしむる一原因で、細心は吾人をして消極的に大なる過誤失敗に陥らしむる事なからしむるものである。膽大の人にして、軽き神経質がなかつたなら、折角築き上げた長堤を蟻穴から崩してゆく事となる。

何でもない

失敗のため、有爲の身を社會からほうむられる事となる。運動家が

野球や擊劍から歸ると、直ぐには本を讀む氣にならないと云ふ。運動をすると、どんな神経質な者でもいくらか氣が粗くなつて、本などを讀む様な氣になれない。之は一例であるが、こう云ふ事は

いくらかもある

細心な太刀山と、粗豪な駒ヶ嶽との取口を見ても分る。太刀山の方は小物になめられる様な事は滅多にないが駒ヶ嶽は、飛んでもない失敗をする、力量なり體格なり殆ど互角の兩力士にして、何故こんなに、本場所の成績が違ふかと云ふと、之はみな粗豪と細心との相違があるからだ、吾人は敢て云ふ。輕き神経質は成功の最大要素であると。

○精確

凡そどんな

事物でも、必ず急所がある。言ふ事でも、爲る事でも急所を外れては、一向手應えがない。事功を擧げるには是非共事物の急所へを押へねばならぬ。急所を突くには何うすれば宜いか

まづ説明で

云ふと、寡言でも能く考へて云ふか、然らざれば、仔細に説明して、總てを云つて了う。澤山饒舌つてるうちには自然急所へ言ひ當てる事になるが、然し之は一方非常な精力の消費をやつてるから、決して

て之は賞むべき事ではない。吾々は

説明をする

前に、能く考へて、間違のない所を云ふが宜しい。文章でもその通り、ヘタラ長いより簡潔で要領を得た方が宜い。用事のみ云はうとするには、そんなに長い事を云ひ、又書く必要はない。要點だけを云へばよいのだ。精確とは之等の要點を漏れなく、網羅し盡した事である。

人でも獸でも

致命傷を受ける所は二三ヶ所に過ぎぬ。其他のヶ所へ幾ら彈丸をうち込んでもナカク死なぬ。出鱈目をやつては、何事にも成功しない。

精確の習慣を養ふには飽迄も細心になる必要がある。冷静なる態度で、之と定めた事を四方八方より、細密に考へたなら、その急所も分るし、又急所に處するの道も分る。吾人にして

成功しよう

と思へば、是非共精確と云ふ事を忘れてはならぬ。如何に偉大なる精力家でも精確と云ふ事を缺いでは、到底成功する事は出来ぬ。精力使用上に精確と云ふ心掛がなかつたならば、其精力は全然濫費に終るからである。

○原理の案出

吾人が成功し

又失敗する時、吾人にしてその理由、原因を細かく考ふるなれば、必ず一大原理に到達するであろう。今日の科學なるものはかくして出来上つたものである。成功の時より

寧ろ失敗

した時に、原理を考へ出すものである。何となれば、失敗した時には猛然として反省し、反省の結果、千思萬考の末、終に同種類の場合を集めて、夫等に通する一大原理を案出する事となる

今日の格言

は、皆な古人が種々の失敗より生み出したる原理である。急がば廻

れとか愚者の考休むに似たりとかは即ち之れである。之等の原理格言を生み出す迄に古人は幾度か失敗し、幾度か泣き、もだる、千辛萬苦の末、這般の原理に到達したものである。原理の尊む可きは、一はこの艱難を貴ぶのである。それで

自分

案出した原理、格言は自ら苦んだ末出来上つたものであるから實踐究行が出来ることが、單に古人の格言を鵜呑みにした丈では、到底之を活用する事は至難である。今日成功くと騒ぎ立てて天下の一大事のやうに云つてゐるが、然し其割に大した。

成功者も

出ぬやうだ。之と云ふのも、畢竟古人先輩の訓言、格言を鵜呑みにし、只記憶し感服すると云ふに止つて、終に之を活用せうと云ふ程の元氣が出ぬからである。單に書物の上で如何な成功訓を知つても、要するに畑水練で實際の用には立たぬ。自ら失敗し自ら経験した上で、茲ぞ動かぬといふ所を見付けて、原理を終身行うてゆく事を努めねばならぬ。

○整理の習慣

吾人が何か

一つ言動とすれば、必ず思想なり、器具なりに一定の秩序を立てる

必要がある。今手紙一本書かうとするにも、紙や筆、墨、硯の道具立が揃つて居なければ、ナカ〜一寸の間に合はない。衣類はもとより書籍や身邊の

小道具迄

平常一定の秩序を立て、置かなければ、外出讀書其他の場合に、忽ち差支を生じ、時間を空費し、空しく思考力を費し、それでも甘く成功すればよいが、時々予定の行動が全くとれない事になる之と云ふのも畢竟

衣類其他

の持物を亂雑に置いてあるからの事である。持物に秩序を立てると

は、使用し易い様に配置する事で、即ち種類の同じものを一つ場所に置き、又取り易い様に、順序よく並べる事である。之は物質的の整理であるが、吾人は之と共に精神的整理も必要である。之も前者と同じく

觀念を

順序よく配列すればよい文章一つ作るにも思想の整理が必要である。况んや大仕事を爲すには殊に此必要がある。思想の試験をするには、話をしてみるのが一番である。頓珍漢な話をしたり、ヘドモドして話が前後したりするのは、必然思想の不整頓な證據である。吾人が怠けなくなるのは、思想不整頓な時に多い。何をするにしても、一たび思

想の順序が立てば、一瀉千里の勢でやれるものである。而して物質的整理は精神的整理から生れるものであるから、吾人は第一思想の整理からしかゝらねばならぬ。

○不時の飲食

孔子の養生訓

に時ならずして食はずと云ふ事がある。不時の飲食は不時の睡眠に等しく衛生上、非常に有害なものである。然るに今日は宴會流行の世の中とて、吾人は止むを得ず

時ならず

して飲食をする。開會が午後一時だと云へば、十二時に晝飯を食つて僅か一時間隔てゝ、再び飲食をせなければならぬ。腹が張つて居れば、食ふには及ばぬ筈であるが、然し

宴會では

飲食をすると云ふ習慣になつても居るし、又現にみんなが飲食をして居るのに自分獨り膝に手を置いて一切箸を付けぬと云ふのも、何だかキマリが悪いので、自然飲食をする事になる。腹は張つて居ると云ふものゝ、元來胃の腑と云ふものは伸縮自由であるから、厭や〜と思ひ乍ら

随分思ひ

と怪訝から起ると云ふが、宗教も亦驚怖と嘆美から起るのである。
仰いで天の蒼々を望み、俯して地の茫茫を見るもの、胸中自ら

油然として

驚嘆の情が湧く又不可思議なる生々死々の現象をのみては、誰かよ
く怪訝の念を生ぜざる可き。人間の存在は、實に大海の一粟である。
蒼茫たる大洋の中に浮袋も持たずして必死で泳で居る。宗教と云ふ救
助船がなかつたなら、人間はみんな沈んで了はなければならぬ。

物質文明

は進んだと云ふ。成程科學も、哲學も非常に進歩して居る。然し進
歩したる今日の學術で空間と時間の謎が分るか。生死の問題を解決し

得るか。遺憾乍ら何れも出来ぬ。吾人は常に不安の中に、煩悶の中に
苦しい生活を續けて居る

知る事が

出来ぬとすれば、是非共信せなければならぬ。知識の不足は信仰で
補はねばならぬ。無限と云ふ事が宇宙の本質である以上、限りある

人間の知識

では、到底天地間の一切を知る事が出来ぬ。如何に世は進んでも何
所迄も不知の世界が残る。此世界は信仰に依りて摸索し、之に依つて
大安心を得るから外はない

世は如何に

進歩しても宗教の必要は毫も減じない。従來の宗教の様に主として未來の安心を與へて居るより今日の様に生存競争が激しくなつては寧ろ現世只今の安心を與へ、萎へたる精神を鼓吹してやる必要がある。宗教も時代の産物である。時代々に依つて其内容と形式とに變化あらしめねばならぬ。

○心配と後悔

苦しい事

には大概利益の伴つて居るものであるが、唯心配と後悔とは、多くの場合不利益で、心身の上に非常な害を來すものである。然し心配も

後悔も等しく反省の結果で、反省の度が過ぎたものであるから、之に依つて

改良の端緒

を得る事はあるが、言動其他の改善なら何も苦んで、心配や後悔をする必要はない。反省をすれば澤山である。少し神經質な者になると四六時中絶えず反省をする。今朝下女に用事を云ひ付ける時、も少し詳しく云つてやれば、こんな馬鹿げた間違はしなかつたろうにと思ふ、單にかう思つた丈なら

單純な反省

であるが、其切那丈でなく、十分間も二十分間も何時迄もクヨク

思ふのは己に反省の域を通り越して、後悔の領分に這入つて居る後悔は第一、時間の損だ。反省に依りて改むれば直ぐなほるが、後悔して後改むれば後悔した丈の時間を

空費した

事になる。第二は後悔は悲哀煩悶の情を伴ふから、夫丈心身を害する。心配して年をとると云ふ。心配の結果、心身の疲勞甚だしく、老衰の期を早むるのである。吾人は毎日頻繁に反省するの必要はあるが、其爲め心配や後悔をしてはならない。

三十年 修養の初旅終

大正三年三月十二日印刷

大正三年三月十八日發行

修養の初旅
正價金四拾錢

著作者 宮地竹峯

發行者 荒川龜次郎
東京市日本橋區小傳馬町三丁目拾四番地

印刷者 渡邊八太郎
東京市牛込區根町七番地

不許複製

發行所

東京小傳馬町三丁目
振替東京九七六五番

山口屋書店

~~10/11/09~~
E

8/

X 94
813

終

